

## 「日本における地蔵菩薩の衆生救済について」

京都西山短期大学 釋 真弥

地蔵菩薩については周知のように釈迦滅後より弥勒菩薩が出世するまでの56億7千万年の無仏の間、五悪濁世の衆生を救済する菩薩、六道の衆生を救済する菩薩として知られている。中でも地獄の救済者として『日本霊異記』や『今昔物語』などの文学などに登場し、『地蔵菩薩靈驗記』など地蔵菩薩の靈驗を説く書物も作成される。これらについては仏教学や国文学の立場より研究がなされ、文学に説かれる地蔵の利益は延命や病氣治癒などの現世利益や地獄抜苦や浄土引接など多方面にわたることが確認できる。

地蔵菩薩の利益の中でも地獄抜苦・地獄救済が多く説かれているが、これは地獄という自らの罪によって墮ちるとされる苦しみと恐怖の世界から逃れる方法として地蔵菩薩の救済が強調されたのであろう。

地蔵菩薩による救済は「六道絵」等の「仏教美術」においても確認ができる。六道絵は『地蔵菩薩発心因縁十王経』や源信の『往生要集』や『目連求母説話』などある説話の内容をもとに描かれ、地蔵菩薩の救済も描かれている。例をあげるならば14世紀成立とされる「出水美術館本十王地獄図」には奈河橋を渡る女人が地蔵菩薩の錫杖を持ちながら、男の亡者は袖を掴んで渡る姿が描かれている。これは三途の川を渡る前に現世へと引き返す姿、いわゆる蘇生譚が描かれているのであろう。また16世紀成立とされる「長寿寺本六道十王図」の閻魔王の部分には地獄の釜が割れ、地蔵菩薩が来迎しているかのような図像が描かれている。このように六道絵等に描かれる地蔵菩薩の救済にもバリエーションがあり、ある意図をもって描かれていると考えられる。

六道絵などの美術作品は絵解きされることが多く、作者が伝えたいことや民衆が強く望んだ願い、時には流行などの世相が反映される。それは文字が読めない民衆に対してイメージとして強く印象付られ、大衆教化という点では有効的であったと考えられる。

文学に説かれる救済と美術に描かれる救済とを照合することで、当時の民衆が何を望んでいたのか、また時代によってその願望はどのように変化していったのかを知ることができるのではないであろうか。

今回は六道絵等の美術作品を中心とし文学との関連性を踏まえて地蔵菩薩の衆生救済がいかなるもので、どのように変化していったのかを考察していきたい。

キーワード：地蔵菩薩、衆生救済、六道絵